

連濁を起す反復形の語のオノマトペ認定に関する考察 — 「しみじみ」「つくづく」の場合 —

中里 理子

A Study on Onomatopoeia Recognition of Repetitive Words
with Voiced Consonants: The Case of *Shimijimi* and *Tsukudzuku*

Michiko NAKAZATO

要 旨

連濁を起す反復語形がオノマトペと認定できる場合、①語基を同じくする派生形があること、②「一する」の動詞形があることを根拠とし、さらに派生形 [A ン B リ] [A ッ B リ] 等がもとの [ABAB] 型と時期の隔たりがなく用いられていること、派生形が発生後に長く用いられ続け、定着していることも条件に加えてもよいと考える。「しみじみ」は二つの条件を満たし、かつ、派生形がほぼ同時期に発生し、現代まで用いられている点でオノマトペと認めてよいと判断できる。一方、「つくづく」は「つづくり (つっくり)」「つくねん」という派生形があるが、「一する」の動詞形はなく、さらに派生形が「つくづく」よりもかなりの時が隔たって発生した点、とくに「つづくり (つっくり)」が一時期の使用に留まった点で「つくづく」を現代語のオノマトペとして認めるのは難しく、「オノマトペに準ずる語」であると考えられる。

【キーワード】 オノマトペらしさ 「しみじみ」と「しんみり」 「つくづく」と「つくり (つっくり)」

はじめに

「しみじみ」と「つくづく」はオノマトペと考えてよいものだろうか。オノマトペの辞典を見ると、山口仲美編『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』(2003年)では「しみじみ」は立項されているが「つくづく」の項はなく、小野正弘編『日本語オノマトペ辞典』(2007年)では「つくづく」は立項されているが「しみじみ」の項はない¹⁾。「しみじみ」は動詞「しむ」に由来し、「つくづく」は動詞「尽く」に由来するとされており²⁾、両語とも語基が重なる際に後項が濁音化している (= 連濁) という点で [ABAB] 型の変形と言える。

「しみじみ」「つくづく」のように後項の語が連濁を起す語は、オノマトペではなく一般

語彙であると考えられる立場がある。古くは、天沼寧編『擬音語・擬態語辞典』（1974年）において、「形は似ているが、擬音語・擬態語とはしないもの」の中に「名詞・副詞・動詞の連用形、形容詞の語幹、その他の品詞の語の一部などを二つ重ねて疊語にしたもの」を挙げ、「黒々（くろぐろ）」「潜々（さめざめ）」「沁々・染々（しみじみ）」「遙々（はるばる）」「久々（ひさびさ）」などを例示し、これらのように「清音・濁音の対応のある音で始まる語は、あとの部分が濁音になる場合が多い」と解説している²¹³

田守育啓・ローレンス＝スコウラップ（1999）では、オノマトペと一般語彙との区別について考察し、「日本語オノマトペの語彙的独自性」を立証する基準を12項目挙げているが、その筆頭に「連濁の適用を受けない：オノマトペの内部の形態素の初めの無声疎外音はけっして有声化を受けない」を挙げている²¹⁴。さらに田守・スコウラップ（1999）は、「しみじみ」について「一見例外と思われる形態」であるが、「語源的には一般語彙「しみ」‘permeating’の反復形である」として「真のオノマトペ語彙」とは区別し、「真のオノマトペ語彙は連濁の適用を受けない」と述べている²¹⁵。オノマトペの語源を考え始めると、例えば「うねうね」は「畝」と、「うきうき」は「浮く」と、「ゆらゆら」は「揺る」と関わりがあるが、『暮らしのことは 擬音・擬態語辞典』にも『日本語オノマトペ辞典』にも掲載されており、「真のオノマトペ」とは何かという問題が生じてしまうことになる。

本稿では、「しみじみ」「つくづく」が、平安時代以降江戸時代までどのように用いられてきたか、歴史的経緯をたどるとともに、二語と関連のある「しんみり」「つつくり（つつくり）」の用いられ方、及び「-する（-して）」という動詞形の用いられ方を検討することで、「しみじみ」「つくづく」の〈オノマトペらしさ〉について考えていく。平安時代から江戸時代までの用例は、国文学研究資料館の「日本古典文学大系本文データベース」によって検索し、さらに国立国語研究所の検索アプリケーション「中納言」の「日本語歴史コーパス」によって補った。参考として明治以降の用例を調査したが、「中納言」の「日本語コーパス」及びインターネット図書館「青空文庫」を利用した。

1 中古から近代にかけての「しみじみ」

1.1 「しみじみ」の被修飾語

「しみじみ」を検索すると、平安時代（以下、中古とする）には1例もなく、鎌倉・室町・戦国時代（以下、中世とする）に10例、江戸時代（以下、近世とする）に61例見られた。明治以降は多数の用例が見られることから、近世後期以降に広まった語と思われる。古いものでは「建礼門院右京大夫集」に2例見られたが、成立を鎌倉初期として中世に含めた。中古に用例が見られないのは、中古において「思ひしむ・思ししむ」「心にしむ」「身に染む」のように動詞「しむ」が多用されていたことと関わっていると思われる。「身にしむ」という表現は中世以降も使われているが、検索の範囲では「思ひしむ・思ししむ」は中古にしか見られず、「心にしむ」という表現は中世・近世で4例しか見られない²¹⁶。近世には「しみじ

み]が多用されるようになり、動詞「しむ」の用例が減少している。「思ひしむ・思ししむ」「心にしむ」ことを「しみじみ」と表すようになっていったのであろう。

「しみじみ」が修飾する語句を見てみると、以下のようになる（複数例は数字で示した。以下同じ）。後述の例(5)のように被修飾語の位置に語が明示されていないものは、「なし」に分類した。

<中世>

感情（マイナス） 1例：ものかなし

「話す」系統 2例：詩吟す 申す

その他の語 7例：ある 覚ゆ しをる する なる 2 見ゆ

<近世>

感情（マイナス） 9例：いやだ 2 憂い かなしい 残念さ 死にたくなる にくい すか
ん 2

感情（プラス） 6例：ありがたし うまい 嬉しい にくかるまじ 恋しい 2

「話す」系統 21例

異見する 暇乞 かこち顔 語らす 語りかく 語る 2 兼言 口説く ささやく 2

真実尽くす 尋ぬ 話 2 話す 2 褒む 申し上ぐ 申す 物語

その他の語 20例

明け暮れ 思ふ 思ひ込む お目に掛る 風が身に染む 気をつく 肝にこたゆる

仕掛ける 立ち居る 付き合う 手を取りくむ とぶらふ 泣き居る なる

肌へつく 枕 学ぶ 見せる 忘れられず 忘れない

なし 5例：（心地 心 枕 身 六根）

感情を表す語、話す様子を表す語が多い。その他の語の種類が多いが、「思ふ」「肝にこたゆる」「忘れられず」など心情に関する語が多いことがわかる。以下にいくつか例を挙げる^{註7}。

- (1) いたく世の中しみじみとももの悲しく覚えて、迷ひ入りし恋路くやしきおりにしも勧めがほなる法の声かな (建礼門院右京大夫集)
- (2) 実におまはんの深切は、身にしみじみと嬉しいけれど (春色梅児誉美)
- (3) お若衆お詫の祈祷頼みますと、しみ／＼語れば講中の先達。 (女殺油地獄)
- (4) のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。 (徒然草)
- (5) たがひにハア、ハア、とばかりに目くれ。心はしみ／＼と。抱きつきたうもあたりには禿が目もと小ざかしく。 (けいせい反魂香)

『角川古語大辞典』を見ると、「しみじみ」は「①心の底まで深くしみ込むさま。深く感

動させられるさま。しんみり。②互いの心にしみ入るように打ち解けて話し合うさま。③心の底から感じているさま。つくづく。本当に。」とある。多くの動詞に接続しても、「心に深く感じる」という心情を表す点で一貫している。①に意味記述として「しんみり」とあるが、「しんみり」がどのように用いられてきたかを見てみたい。

1.2 「しんみり」の用法

「しんみり」は中古・中世の用例は見られず、近世後期に4例（「小袖曾我薊色縫」のト書きに3例、「春色梅児誉美」に1例）あり、語形の似た「しんめり」が同じく近世後期に2例（「鎌倉三代記」「浮世風呂」）見られただけである。以下、用例を挙げる。

(6) ト是より誂へしんみりとした合方に成り、清心△兩人を見て嬉しき思入。

(小袖曾我薊色縫)

(7) 騒唄。たえぬ世界に爰はまた。閑幽^{しんみり}とした船宿の。二階に二人さし向ひ。

(春色梅児誉美)

(8) どよめきわたる風呂の中、しんめりとして枕丹前をうたへば六法で振こむ裸体あり。

(浮世風呂)

例(6)に見るように、「小袖曾我薊色縫」は3例ともト書きの三味線演奏の指示に用いられている。例(7)とも併せて近世の4例はすべて「しんみりとした」という用いられ方であり、「しみじみ」が多くの動詞を修飾していたのに比べて用法が限られている。「しんみり」は明治時代以降には多くの用例が見られ、近世後期以降、広まったものとみられる。

部楓(2008)では、現代語の「しんみり」と「しみじみ」の共起語句をまとめているが、上位5語は「しんみり」が「する／話す／語る／言う／聞く」であり、「しみじみ」が「話す／語る／する／思う／言う」であるという。これらを見ると、「しみじみ」の共起語句が歴史的経緯と深く関わっていること、さらに、「しんみり」が「しみじみ」と同様の語句に係っていくようになったことがわかる。

意味上、及び共起語句の面からも「しんみり」は「しみじみ」と深く関わっており、用例数から見て「しんみり」は「しみじみ」という語から派生した語と思われる。「しみ」を語基と捉え、オノマトペの語形[AンBリ]に当てはめた「しんみり」という語にしたものであろう。[AンBリ]型と[ABAB]型が対応するオノマトペは少なく、「しんみり」「しんめり」を加えて次に挙げる11語程度である³⁸⁸。

ざんぶりーざぶざぶ	しんみりーしみじみ	しんめりーしめじめ	ちんまりーちまちま
にんまりーにまにま	のんびりーのびのび	ひんやりーひやひや	ふんわりーふわふわ
ぼんやりーぼやぼや	まんじりーまじまじ	やんわりーやわやわ	

これらは少数例ではあるが、語基「AB」から派生したオノマトベの2種類の語形である。「しんみり」は、[ABAB]型「しみじみ」から派生した[A ンBリ]型のオノマトベと考えられるが、「しんみり」「しみじみ」が時をほぼ同じくして用いられている。「しんみり」「しみじみ」は、語基「しみ」から派生したオノマトベと認めることができるだろう。

1.3 「しみじみ」の動詞形

田守・スコウラップ(1999)では、オノマトベが「-する」動詞に組み入れられることについて、「少数の例外を除けば、擬態オノマトベに限定される」とし、「典型的な擬態オノマトベである擬情語は(中略:引用者)例外なくすべて「-する」動詞への組み入れが可能である」と述べ、例の中に「しんみりする」を挙げている²⁹⁾。そこで「しみじみする」「しんみりする」という動詞形について見てみた。

- (9) 聞より出来る能と申は、さしよりしみ／＼として、やがて音曲調子に合て、しとやかに面白き也。(花鏡)
- (10) 万人の心、いまだ能にならず。されば、左右なくしみ／＼となる事なし。(風姿花伝)
- (11) 其姿なか／＼腎[の]臓をけばだゝしめ、六根にしみ／＼としてあの夕日にはゞかりながらたばこ一ぷくのむほどあやかりなば(ひとりね)
- (12) 伊豫屋が表にて、古い花色の布子着たる男としみ／＼としたる物語久しくして立別れけるを、(好色万金丹)

中世・近世の用例には「しみじみする・しみじみして」と用いられたものはなく、「しみじみと」を基にした「しみじみとして」「しみじみとした」「しみじみとなる」という例が見られた。

明治時代以降を見ると、同様に「しみじみとして」「しみじみとした」という引用の助詞「と」を介して用いられる例が多数なのだが、大正時代頃から「しみじみした」「しみじみする」という「と」を介しない例が見られるようになる。

- (13) しかし人々が皆我を滅して、しみじみした涙を流し、
(和辻哲郎「自己の肯定と否定と」1914 大正3)
- (14) 病氣に傳染して入院して居るその混亂と悲痛との心持が、如何にもしみ／＼した調子で、誇張やセンチメンタルな所なく簡勁な筆で描かれて居る。
(『太陽』記事 1917 大正6)
- (15) 私は長い間忘れていた、幼い、しみじみした気持になって、ふと、そこにあった弟の日記帳を繰ひろげて見ました。
(江戸川乱歩「日記帳」1925 大正14)
- (16) 僕のしみじみした心もちになつてマインレンデルを読んだのもこの間である。
(芥川龍之介「或旧友へ送る手記」1927 昭和2)
- (17) 恋愛から入った夫婦でなくてはこうしたしみじみした諦感は起こるまい。

(倉田百三「女性の諸問題」1934 昭和9)

(18) 娘がいつもと違った人間のようにしみじみして来た。

(岡本かの子「河明かり」1939 昭和14)

同様に、「しみり」について見てみると、近世では先の例(6)のように「しみりとした」と用いられているが、明治時代末以降に「しみりして」「しみりした」という例が見られるようになる。

(19) 話の具合が何だか故の様にしみりしない。(夏目漱石「それから」1909 明治42)

(20) 光子様もよいがああの當世向より安子様のしみりしたのが私は好きだ

(『女学世界』記事 1909 明治42)

(21) しみりしたような話が、しばらく続いていたのであった。

(徳田秋声「爛」1913 大正2)

(22) 騒々しい亞米利加風のところがなくて、如何にも落着いたしみりした氣分が全體に漲つてゐるのが何より快い。

(『太陽』記事 1917 大正6)

(23) お母さまの御言葉でしみりする。

(『婦人倶楽部』記事 1925 大正14)

「-する」「-して」と用いられるのは「しみり」のほうが早かったようであるが、大正時代末からは「しみじみ」も「-して」「-する」と用いられるようになったことから、「しみじみ」も「しみり」と同程度にオノマトペらしさを認めてよいと考えられる。

2 中古から近代にかけての「つくづく」

2.1 「つくづく」の被修飾語

「つくづく」は中古以来多くの用例が見られる。被修飾語を整理するに当って、便宜上、同系統の動詞をまとめて示すこととした。

<中古>

「思ふ」系統 26例

思ふ6 おぼす3 思ひ続く5 思し続く5 思ひ乱る 思ひ入る おぼし入る2
思しなげく 思ひ出づ 思し出づ

「見る」系統 38例

まもる／まほる／うちまもる14 見る15 御覧ず2 見送る 見やる
見いだす 見ゐる 見入る2 見渡す

「聞く」系統 11例

聞く8 聞き入る 聞き見る 見聞く

「ながむ」系統^{註10} 29例

眺む19 ながめ入る 4 ながめいづ 4 眺め暮らす 眺め明かし暮らす

「ゐる」「過ぐす」系統 17例

おはします ゐる 4 おはす 2 物す 寄りゐる こもる あり す 2 過ぐす 3
暇あり

「臥す」系統 13例

臥す 9 独り寝す 眺め臥す 2 聞き臥す

「泣く」系統 6例

泣く 2 涙こぼる ねを泣く 涙流れ出つ 涙漏り出づ

その他の語 7例

(車を)立てる 目を覚ます 老ゆ れうず 罪を作り積む 心騒ぐ 聞こえつづく

<中世^{註11}>

「思ふ」系統 44例

思ふ18 おぼす 思しめす 2 案ず14 思案す 2 思い続く 4 思ひを尽くす
思ひ廻らす 思い連ぬ

「見る」系統 56例

まもる12 見る30 御覧ず 4 かへりみる 2 見聞く ながめ 2 ながむ 4 見ゆ

「聞く」系統 14例

聞く11 聞し召す 3

「ゐる」「過ぐす」系統 7例

暮らす 思い暮らす 眺め暮らす ながめ過ぐす 眺めおはす 候ふ 2

その他の語 8例

立つ 待つ 3 降る(雨) まかる おこなふ 泣く

<近世>

「思ふ」系統 49例

思ふ24 物思ふ 3 存ず おぼす 2 案ず 4 思案す 思ひだす 2 思ひつく
推量す 思い廻らす 3 思ひやる 思ひかへす 観ず 尋思す 考へ思ふ 考ふ 2

「見る」系統 73例

まもる 7 見る40 御覧ず 2 眺む 9 眺め果つ 眺め居る 見送る 目送る 3
見そなはす 見入る 3 のぞく 2 見上ぐ 見れば思へば 2

「聞く」系統 22例

聞く18 聞き済ます 聞き果つ 聞こし召す 聞取る

その他の語 13例

悟り開く 実検あり 並び居る 申す 物語 立ち留る 数ふ 算用する 寝られず
流れる あはれを尽くす 鳴る 悔いる

なし 1例 (やさしい詞)

「しみじみ」とは異なり、「つくづく」は平安時代から多くの用例が見られる。被修飾語はほぼ定まっており、中古から近世までを見通すと、「思ふ」系統、「見る」系統、「聞く」系統が多いことがわかる。

『日本語オノマトペ辞典』の「つくづく」の項では「①注意深く見聞きするさま。念入りに観察するさま。②心に深くしみ込むさま、心の底からそう思うさま。しみり。しみじみ。③意欲や行動を伴わないで沈んだ気持ちでいるさま。ほんやり。つくねん。」と解説されているが、辞書の③の用例は明治41年の石川啄木、中世の風雅和歌集の例となっており、現代語の意味とは考えにくい^{註12}。現代語では①・②の「見聞きする」「思う」が多く用いられており、その傾向は平安時代から変わらないことが検証できた。現代語では使われなくなった「③意欲や行動を伴わないで沈んだ気持ちでいるさま。ほんやり。つくねん」の意味は、中古に多かった「ながむ」系統、「臥す」系統、「ある」「過ぐす」系統の被修飾語の例と関わりが深いと考えられる。以下に用例を挙げる。

- (24) 中將の君、うちいで給ひては、いとゞ忍び難うのみ眺めまさりつゝ、すべて現心もなく、世に長らふべくも思えぬに、たゞつく／＼と眺めのみせられて、「いかさまにせん」と、沈み臥し給へるに、
(狭衣物語)
- (25) いと、口惜しかるべければ、如何にせまし」とおほし煩ひて、つく／＼と、ながめふし給へり。
(源氏物語：花の宴)
- (26) 北の方、我御殿の桃園なるにわたりて、いみじげにながめ給ときくにも、いみじうかなしく、我こちのさはやかにもならねば、つく／＼とふして、思ひあつむることぞ、あいなきまでおほかるを、
(蜻蛉日記)
- (27) 「君は、かくてのみも、いかでかは、つく／＼と過ぐし給はん」とて、院へまゐり給ふ。
(源氏物語：葵)
- (28) こゝには、いとゞ、ながめまさる頃にて、つく／＼とおはしけるに、晝寝の夢に、故宮の見え給ひければ、さめて、いと名残かなしく思して、
(源氏物語：蓬生)
- (29) すこし思し紛れつる心の中もかきくらし、思し續けて、長押に寄りかゝり給て、つく／＼と居給へるに、うち驚きて、見合せ給へるも、
(狭衣物語)

例(24)～(29)に見るように、「眺む」「臥す」「ある」「過ぐす」系統の用例は、ひとり物思いに沈んでいる状態、何をなすでもなく、ひたすら物思いに沈んでいる状態にあることを表している。このような「つくづく」の意味・用法は、中世にはかなり少なくなり、近世以降はほぼ見られなくなっている^{註13}。この「つくづく」の意味と深く関わっていると思われるのが、「つづくり(つづくり)」という語である。次項では「つづくり」について見ていきたい。

2.2 「つつくり」の意味用法

『角川古語大辞典』には「つつくりと」の項があり、「擬態語。何もしないでじっとしているさま。つくねんと。特に、「かたこと」に「つゝくり さびしう独り立たるさまか」とあるように、一人だけで所在なく立つさまにいうことが多い」と解説されている。中古から近世にかけて用例を検索すると、狂言に8例、近松の「山崎與次兵衛壽の門松」に1例、「ひとりね¹⁴」に1例見られる。中世末から近世になって使われ始めた語のようである。以下に例を挙げる。

- (30) さてそれはともあれ、夜前のかがしは何としたか知らぬ。さればこそ、あれにつゝくりと¹⁴している。 (狂言「瓜盗人」)
- (31) 母は始終つゝくりと。なうお傾城の詰開は。むつかしさうな事やとて 耳を澄すぞ殊勝なる。 (山崎與次兵衛壽の門松)
- (32) 今宵もつづくりとひとり硯に向ひて、かはせし人のようすがも聞たふ、そなたの鐘のひびきくるに、 (ひとりね)

狂言の8例はすべて例(30)のように、「つつくりとしている」「つつくりと致しております」という用いられ方である。『角川古語大辞典』にあるように、「独り」「何もしないで」「所在なく」居る様子を表している。これは「つくづく」の「眺む」「臥す」「ゐる」「過ぐす」系統の語とともに用いられた意味に通じている。「つくづく」の「③意欲や行動を伴わないで沈んだ気持ちでいるさま。ほんやり。つくねん」という意味は、中世末から「つつくり」という語が用いられてからは「つつくり」が表すようになり、「つくづく」では使われなくなったと考えられる。「つつくり」は「つくづく」が「つく」という語基の反復形であるという意識の基に、[ABAB]型から派生した[A ッ B リ]型の語と考えられる。

辞書記述にある「つくねん」という語も、「つく」という語基から派生した「-ネン」型の語¹⁵であると考えられる。「つくねん」は、近世後期に2例見られる。以下に例を挙げる。

- (33) 戯作に立よる花の蔭お山の大将只一夜。瓦灯のもとにつくねんと。明烏後の正夢と題して。鶴賀若狭が正本に原稿。 (明烏後の正夢 1821年)
- (34) 小三は乳母や下女を臥しめ。行灯の側につくねんとひとり何やら物案じの。顔うちながめ、 (仮名文章娘節用 1831年)

「つつくり」と同様に「独り」「所在なく」いる様子を表している。「つくづく」の「沈んだ気持ちでいるさま」の意味を「つつくり」と「つくねん」が分け持ったと考えられる。「つつくり」が明治以降はほぼ用いられなくなったのに対し、「つくねん」は明治時代以降も見られ、次の例(35)のように教科書に記載されている例もあり、一般的に広まったことがうかがえる。

- (35) 百五十年ばかり前に、いぎりすに、うーすとるといふ人があった。ある寒い夜、つく

ねんと、爐のはたにすわって、爐の上にかけてある鐵瓶を見つめてゐる。

(「高等小学校国語」1904 明37)

「つく」は、いくつかのオノマトペを派生させている点で、オノマトペの語基と考えることができ、「つく」を重ねた「つくづく」はオノマトペと認めてよいという根拠になる。先に見た「しみじみ」「しんみり」が意味を重ねたまま用いられたのに対して、「つくづく」は意味の一部を「つづくり」「つくねん」と分け合っているが、たとえば「うとうと」と「うっとり」のように、同じ語基の派生形で意味を分け合うオノマトペの例は他にも見られる。

問題があるとすれば、「つづくり」という語形が、「つくづく」の使用からはるか遅れて用いられるようになったことと、近世にしか見られないことである。近世は多くの語に[AッBリ]型や[AンBリ]型が生まれた時期である。『日本語オノマトペ辞典』を見ると、現代語では馴染のない語で江戸時代の用例が掲載されているものに「ずっけり」「ぬっくり」「ぬっけり」「ぞんべり」「どんぶり」などがあるが、それぞれ「ずけずけ」「ぬくぬく」「ぬけぬけ」「ぞべぞべ」「どぶどぶ」という[ABAB]型のオノマトペと関連がある。「つづくり」は中世末から近世に用いられたが、明治以降はほとんど使われていないことから、近世において一時的に使われたオノマトペと考えられる。一方、「つくねん」は昭和時代まで見られることから、「つづくり」は近世後期から「つくねん」に取って代わられたと見られる。その「つくねん」も現在ではほとんど見られない¹⁶。

『日本語オノマトペ辞典』の「つくづく」の意味のうち、「①念入りに」は「つらつら」の用法に近く、程度性が高いためオノマトペらしさは低いように思われる。「②心に深くしみこむ」と「③沈んだ気持ち」の意味には心情を表すオノマトペらしさがあると思われるのだが、このうち③の意味は現代においては「つくづく」から消えていると言ってよい。②の意味は心情に関わる擬情語に近いが、田守・スコウラップ(1999)が言うように、「「-する」動詞への組み入れが可能である」かどうかを次項で見えていく。

2.3 「つくづく」の動詞形

中古から近世、現代まで「つくづくする」という用例はない。「つくづくとする」は「つくづくとして」という表現で中古に2例ある。

(36) いと、おほつかなく、思ひて、「いつしか、人にもなして見む」と、思ふに、つく／＼として、起きあがる世もなく、いと、怪しうのみ、物し給へば、

(源氏物語：手習)

(37) 暮れぬなりいくかをかくてすぎぬらん入相の鐘のつく／＼として

(新古今和歌集：和泉式部)

例(36)(37)はいずれも物思いに沈んだ状態であることを表しているが、この2例以外

は全て他の動詞を修飾している。また、注12に示したように、近世以降現代に至るまで、「つくづく」という表現が1例見られただけで、「つくづくしている」はもちろんのこと、「つくづくとしている」という用例も見られなかった。動詞形が認められないという点ではオノマトペらしさは「しみじみ」よりも低いと言える。

3 連濁を起す反復形の語とオノマトペらしさ

以上見てきたように、連濁を起す反復語形がオノマトペと認定できる場合、①語基を同じくする派生形があること、②「一する」の動詞形があること、という二点は有力な根拠になると考えられる。さらに、派生形 [A ン B リ] [A ッ B リ] 等が、もとの [ABAB] 型とそれほど時期の隔たりがなく用いられていること、派生形が発生後に長く用いられ続け、定着していることも条件に加えてもよいのではないかと考える。

「しみじみ」は二つの条件を満たしており、かつ、派生形がほぼ同時期に発生し、現代まで用いられている点でオノマトペと認めてよいと判断できる。一方、「つくづく」は「つづくり (つっくり)」「つくねん」という派生形があるため、「①語基を同じくする派生形がある」という条件を満たしているが、「②「一する」の動詞形」はなく、さらに派生形が「つくづく」よりもかなりの時が隔たって発生した点、とくに「つづくり」が一時期の使用に留まった点で、「つくづく」を現代語のオノマトペとして認めるのは難しいと思われる。

「しみじみ」と「つくづく」は次の例に見るように、類義語でもある。

- (38) なるほど、弱将の下、勇卒なしとは、よくいったもんだ！ としみじみ感じたのであるが、こいつもやはり、雷様のお通りになった後は、爽涼感と蘇生と二重の喜びを、感じるらしい。恐怖の去った後でハシャギたくなるのは、何もの人間だけとは限らねえもんだな！ と、つくづくそう感じたことである。

(橋外男「雷嫌いの話」1957 昭和32)

例 (38) において二語はほとんど同様の使われ方をしており、「しみじみ」がオノマトペで「つくづく」はオノマトペらしくないと断じることにためらいもある。「つくづく」は、他のオノマトペとは異なっているが、「オノマトペに準ずる語」と考えるのがよいのではないだろうか。

おわりに

連濁を起す反復形のオノマトペの中から「しみじみ」「つくづく」を取り上げ、オノマトペと認めてよいかどうかについて検討した。日本語は反復形の語が多く、オノマトペの認定の問題が存在する。本稿はその手がかりの一つとして認定のあり方を提案するものである。オノマトペの認定とともに、現代語の意味用法を考える際にも、どのように使われてきたかという歴史的経緯をたどることの有効性が明らかにできたと考える。今後は、オノマトペ認

定の際に問題となる他の語について考察を加えていきたい。

【注】

- 1 「しみじみ」は立項されていないが、「しんみり」の使い分けとして、「つくづく／つらつら／しみじみ」の意味の違いが書かれている（196頁）。
- 2 『角川古語大辞典』では「しみじみ」の項に「染染、沁沁」と漢字表記されており、「つくづく」の項に「つく（尽）」を重ねたものか」と解説されている。
- 3 『擬音語・擬態語辞典』冒頭の解説「擬音語・擬態語について」の23頁参照。
- 4 『オノマトペー形態と意味―』210頁の記述による。田守・スコウラップ（1999）は連濁について30頁、204頁で Martin Samuel の論文を基に論を展開し、「連濁という規則は日本語のオノマトペ語彙と一般語彙との区別を認識するのに重要であると思われる（206頁）」と述べている。
- 5 『オノマトペー形態と意味―』204頁。
- 6 他に、中古にはない表現で「胸にしむ」「肝にしむ」が浄瑠璃や狂言台本に3例見られた。
- 7 用例は本稿「はじめに」に示したデータベースによる。便宜上、繰り返し記号は／＼で示す。
- 8 『日本語オノマトペ辞典』で立項されている語のうち、一般的な語を選んだ。
- 9 『オノマトペー形態と意味―』58頁。
- 10 「空をながむ」のように、「見る」意味が強いかと思われる例もあるが、平安時代の用例の場合は「～を見ながら物思いにふける」意味があると思われるため、「ながむ」に含めている。
- 11 ここでは、「山家集」、能・狂言の用例も中世に含めている。
- 12 小野正弘主幹『現代新国語辞典 第六版』においても、「つくづく」の意味は「①念を入れて考える（・見る）ようす。②身にしみて深く感じるようす。心の底から。」の2つである。
- 13 明治以降の用例を見ると「唸しめしつくづくとみる冬日中（北原白秋「黒繪」1940 昭和30）が見られる程度である。詩的な表現として使われていると思われる。
- 14 「ひとりね」は柳沢淇園の随筆で、成立は1724年とされる。
- 15 「-ネン」型のオノマトペと思われる語には「つくねん」「ぼつねん」などがあるが、「もくねん（黙然）」など漢語の「-ネン」に由来していると思われる。拙稿（2018）で「-ネン」型のオノマトペについて検討している。
- 16 「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）少納言」及びWEB上の「読売新聞」「朝日新聞」「産経新聞」の記事から「つくねん」を検索したところ、小説で1930年にあるものが一番新しく、それ以降の例は1例も見られなかった。

【引用・参考文献】

- 天沼寧編（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
白倉紫薫（1991）「『つくづく』考」『福岡大学日本語日本文学』20号
小野正弘編（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館
小野正弘主幹（2019）『現代新国語辞典 第六版』三省堂
部 楓（2008）「コーパスを利用した類義語のコロケーション分析―擬態語「しんみり、しみじみ」

み」と動詞の共起から一』『言葉の科学』19号（名古屋大学言語文化研究会）
田守育啓・ローレンス＝スコウラップ（1999）『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版
中里理子（2018）「「-ネン」型のオノマトペ小考—和語と漢語の関わりから—」『佐賀大学国語教育』
第3号（佐賀大学国語教育学会）
中村幸彦・阪倉篤義・岡見正雄（1982～1999）『角川古語大辞典』1～5巻 角川書店
山口仲美編（2003）『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』講談社

* 付記：本稿は科学研究費基盤研究（C）（一般）「日本語オノマトペの原理的考察と記述的分析」（課題番号：20K00637）の研究成果の一部である。